

連載

ああ、猪猟泣き笑い

その15年を振り返り

川崎市

田宮 治

色んなことがありました…



⑤ いくつになっても初猟は

●初猟、それは特別な一日

初心、初夢、初獲り、初ホームラン…。何事によらず「初物」の味は格別な思いがある。ましてや、趣味の「狩猟」での「初猟」となると、何回・何十回経験しても、その味はまさに格別である。

その日が近づくと、遠い昔の故郷新潟の山々や、その時どきの猟友や愛犬、猟果までもが、まるで昨日のことのように思い出される。そして、子供の頃に遊んだ山河での出来事や、亡き父の教えまでもが素直な気持ちで辿れるのもこの頃である。

すでに50回も経験してきた「初猟」であるが、この歳になっても相変わらずのバカ丸出しで、「よし、今年もやるぞ!!」と、カラ元気を出し、「最高の猟期になりますように…」などと念ずる気持ちも全く例年どおりである。「よくもまあ、ここまで…」と、自分でもあきれているから始末におえない。

何事においても、並大抵の決意・努力では目的を達成することはできない。大きな山を越えてこそ、真の喜びや達成感を味わうことができるのである。「たかが狩猟、

されど狩猟」である。

単独猟において、1人で思いどおりに獲れる猟人にすれば、その目的達成はしごく簡単であろう。単独猟であるから、1人で獲るのが当たり前であり、当然、それくらいレベルでなければ単独猟は成り立たない。

単独猪猟は、まず犬群を鍛えて訓練から実戦の構成を考える。その時どきの山の様子を見る。他の入猟者の動向や、イノシシの寝屋の状況を見切る。これらを全て1人で行わなければならない。中には、イノシシの「見切り」も満足にできない単独猟人もいるが、そうした人は謙虚に反省し、失敗を恐れることなく、しっかりと学ぶことだと思おう。

失敗の数は、成長への一歩である。学んだことは、やがて自分の中で猟常識となり、全てのことについて思いをめぐらせ、何事も1人でやり遂げられるようになる。このことが単独猟の醍醐味でもあり、また意義でもある。

私も毎年、猟犬の訓練から射撃練習、体調管理まで黙々とこなし、ひたすら「その日」を待ちわびているのである。単独猟者にとって、まず確認したいのが愛犬群の仕上



17年度初猟の山梨の猟場

がり具合である。初猟では、犬群の芸、特にパックの相性や協調性を見極めたいものである。猪猟は、犬群次第である。猟期の楽しみも成果も、良い芸をこなせる犬群があればこそで、その仕上がりは一番気になる場所である。

こうした意味からも、初日ともしなれば、訓練とか下見の入山ではなく、実戦の場となる。私は常々、「のんびり、ゆっくり、安全・安心の猟」を心がけているのだが、初

猟の日だけは特別な注意を払っている。実戦ともなれば訓練とは違って、当然気持ちも高ぶり逸る。そして、この「逸る気持ち」ほど怖いものはない。

特に大物猟では、本誌2005年12月号特集「猟場を守れ！」でも述べられていたように、猟場は限られており、好猟場ともなれば、さらに範囲も限られてくる。そして初日、その限られた好猟場に多くのハンターが入って行く。仮に知り尽くしたイノシシの住所や番地であっても、私のように都市に住む狩猟者は、ままならない状況に追い込まれることも年中行事になっている。

狩猟人口の減少を嘆いていたはずが、この日ばかりは「山奥の小道」も多くの猟人達で「ハンター街道」と化す。そして、「われ先に」と逸る気持ちがベテランハンターの理性を狂わせ、矢先確認ができないままの狩猟行為によって事故を引き起こしてしまう。12月に入る頃には狩猟者も落ち着きを取り戻し、思いどおりの猟ができるようになるのだが…。解禁からの数日間は、特に注意が必要だ。と言ってはみるものの、かく言う私も初日は「何が何でも獲って

やるぞ！」の意気込みで入山する。訓練と実戦は、状況も精神状態も天と地ほどの差がある。限られた猟場に同じ思いの猟人が集結するのだ。ここは一番、さらなる「ゆとり」の安全猟で行きたいものである。

●初猟は山梨の山で…

私の今猟期に臨む心構えは、「人は撃つな」「犬は撃つな」、そして「自分も死ぬな」であった。これらのことを前提に、私の平成17年11月15日を紹介する。

私が今猟期の初猟に決めたのは、山梨県の某山である。この山は私のお気に入りの猟場で、昨年、ここに通う5人の先輩方に私の愛犬の子犬(7頭)を送り出しており、その方々から「良い子に育ったよ」と聞くのが何よりも嬉しい。

山梨特産の美味しい桃やブドウを食べきれないほど送っていたのだ。いうえに、快く「猪撃ちに来なさい」と、嬉しい誘いをいただくようになり、家族ともども喜んでいた。そんなわけで、新猟期の一番獲りはこの猟場で…と決めていたのである。

解禁前夜、これまで打ち合わせたことの最終確認を行った。いつ



「ラン号」と「クマ号」の名コンビ

もの本沢は、全体的に地元の大物猟のグループが狩るとのこと、私は単独で、その上の沢を境に峠道に沿って頂上までやらせてもらうことにした。

その沢は、3年前の2月に、「クマ号」「シロ号」「竜号」「奈智号」「ミス号」「ラン号」で、8時間大猪と闘った場所である。そのときは雪が膝上まであり、おまけに初めての山だったので勝手がわからず、やっとの思いで私がたどり着いたのが5時10分。辺りは暗くなり、当然撃つこともできず、攻防中の犬達を呼び戻し、無念の



一瞬を撃つ。単独猟はイノシシよりも鳥が得意

退散をした思い出の場所でもある。後日、約120kgの大猪が咬み殺されたらしく、皮だけの死骸があった沢で、頂上は1800mほどで、意外ときつい所である。初猟は、特に気分良くできるのが最高で、堂々と狩れる猟場を快く承諾してくれた地元の人々には感謝、感謝である。

11月15日。午前4時に目覚めると、外は雨だった。万全を期して揃えた荷物を車に積み込み、雨の中央道をひたすら走り現地に到着。小沢の橋の柵に犬達を繋ぎ、マーカーなどの準備をしていると、峠

の上のほうから松戸氏と渡辺氏がそれぞれの車で下って来た。

「おはようございます。また、大切な猟場を使わせていただきです。今年もよろしく」と挨拶すると、2人はニコニコしながら「早かったね。私達は下の本沢をやるので、上なら大丈夫。道の所々に掘り跡があるので、入っているかも知れないよ」と言ってくれる。

久し振りに、こうした心遣いは本当に嬉しい。「じゃあ、頑張つて」と言い残し、2人は下へ下って行った。

さて、今日は平日で学校があるため、孫も妻もいない。何をやるのも1人である。忘れ物がないか、何度も確認して「よし、行くぞ。よしよし」と、1頭ずつ頭を撫で、その場で放犬した。「頑張れ！」

私の声も聞こえぬほど、全犬は一目散に沢奥へ走って行った。

私はその後を、ゆつくり沢俵いに頂上を目指して狩り進むことにした。

小沢の所々に掘り起こした跡

があり、その足跡から60〜70kgのイノシシだろうと判断できた。足跡があまり古くないので、すぐに鳴き出して咬み倒すことを期待したが、なかなかその気配がない。この日の愛犬達は、可愛がりすぎで全犬太り気味である。中でも「ラン号」と「サクラ号」はずいぶんふつくらしているが、動きは悪くない。

今日は、3年前にこの沢を攻めたときの犬群から、強烈な咬み犬の「竜号」と「奈智号」、それに素晴らしい絡みと咬みの「ミス号」と「シロ号」を外し、新しく組み替えたパックである。決して3年前のパックに劣るとは思わないが、なにぶんにも初めてのパックである。期待と不安が交差する。

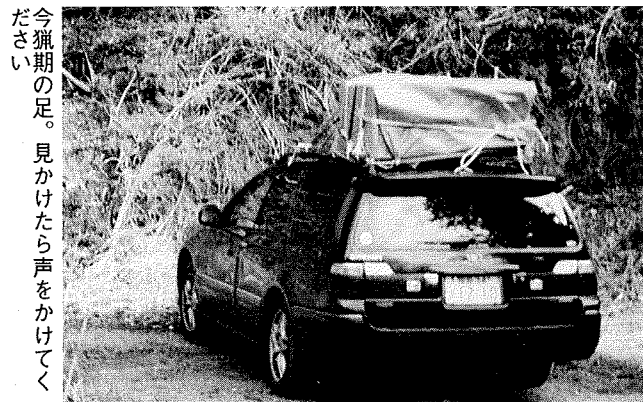
これまでの「ブル号」と「ラン



初猟参加の「富士雄号」(左)と「サクラ号」



一流芸の「ブル号」



今猟期の足。見かけたら声をかけてください



期待の若犬「ゲン号」



日頃の訓練がものを言う



3年前の精悦達

号「クマ号」に、新しく「富士雄号」「サクラ号」「ゲン号」を加えた私の犬舎の精鋭達である。イノシシさえ居れば、必ず止めざるはずである。ただ少々気がかりなのは、「クマ号」「ブル号」「富士雄号」の先犬争いである。加えて、イノシシを目の前にしての攻防の折、一番犬の自覚ゆえの争いが起こりはしないかの不安もあり、私の最も得意とする「隠れ猟場」でのピンポイント攻撃は控えたのである。

号」達がビシッとガードしているようで、小気味よい動きである。できる猟人ならば、この様子をひと目見ただけで犬群のレベルがわかると思う。

よしよし、先犬同士のコンビも最高だ。イノシシが入っていれば、いただきだ……。そんなことを思っで登り続けるが、とうとう鳴き出すこともなく頂上に着いてしまった。右手には本沢の山々が、今が真っ盛りの紅葉で実に美しい。

しばし、その風景を眺めていると、突然静けさを打ち破って2発の銃声が響いた。松戸氏のグループの勢子銃のようだ。わが犬群

達は耳をピンと立て、一斉にその方向へ走った。これは困ったことになった。大沢を一つ隔てた彼らのグループの所まで行くのだから……。まあいいか、行けば止めるだろうし、そのときは「撃ってください」と言っている。

腰を下ろして待っていると、汗が引いて少し寒い。おにぎりを食べながら、今が見ごろの峰々を眺めていると、つい先ほどまでガステていたのが嘘のように天気になり、いよいよ猟日和になってきた。20分ほど経つたらどうか、「富士雄号」を先頭に全犬が帰って来た。

私は1頭ずつ呼び寄せ、「よし

よし」と頭を撫でながら、食べていたおにぎりとソーセージを与え、「いないなあ、イノシシは……」と話しかけた。犬達は私の近くで、それぞれが横になった。訓練とは違って、疲れた様子である。「お前達、太めだから疲れるんだよ」と声をかけたが、意味もわからず上機嫌で尻尾を振っている。

初猟は、このくらいの体で迎えて、次第に引き込んでいくことでちょうどよくなる。私は、犬達にとつてそれが一番良いと考えている。痩せていてはパワーが出ない引き込み、絞られた体こそベストである。

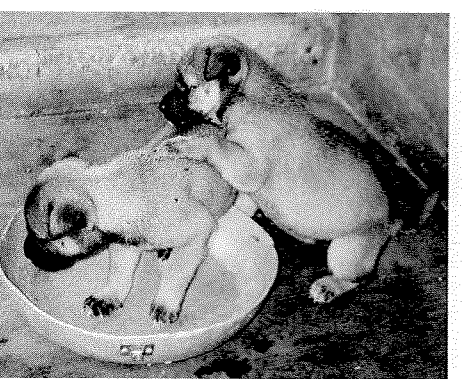


秘蔵っ子達(期待の田宮系?)

さて、第二ラウンドの開始である。今度は、左の大尾根伝いに峠道を下り、入山した上の沢の谷に下りながら狩り落とす作戦である。11月だというのに暑いし、見通しも悪く、スコープで向こうを跳ぶイノシシなど到底狙える状況ではない。そして、とうとう3年前に大猪の皮を獲った思い出の場所に出た。

この辺りは良い寝屋であるが、やはりイノシシは居ない。あのと

き、骨と皮の大猪を犬から取り上げ、引つ掛けた大きなナラの木の横に張り出した枝を眺めると、あときの光景が昨日のように思い出される。犬達は何事もなかったように、その横を狩り進んで行く。そして、「今日イノシシが出る」としたら、「ここだろう」と思う岩場の上の、竹交じりの藪にさしかかった。ここは前に、藪から飛び出したイノシシが岩場の下の谷で止まり、この岩に肘をついて撃つた所である。私は50mほど下を、そのときのように覗き込んで、期待感で1人ニヤニヤした。



良い子はよく食べる(極秘の交配)

ここは、とても良い寝場所、ドングリなども多く落ちており、そこここに掘り跡があるが新しくはない。改めて、イノシシは多くないことを実感した。今どきのイノシシは、山の上ではなく、人家の近くに下りているのかも知れない。結局、今回も「ギャン」のひと声もなく、一つ上の沢伝いに峠道に出てしまった。

張り詰めていた気持ちが切れ、どつと疲れが出た。先犬3頭にだけ引き綱を付けて車に戻った。いつもなら、こんなときは車で待っている孫や妻が犬達を犬箱に入れてくれるのだが、今日はそれさえも自分でやらなければならぬ。マーカーを外して箱に入れ、犬達には、1頭ずつタオルで全身を拭きながら、ねぎらいの言葉をかけてやり、犬箱に入れた。

さあ、引き揚げよう。運転席に座ったが、足がつつて運転ができずの状態ではない。一度車から降り、少し高くなっている所に腰掛け、足を揉みほぐす。ああ、歳だよなあ。なんとも情けない。だが、足がつるのも当然だった。もう1時になろうとしている。ずいぶん歩き続けたことになる。



手をかけなければ名犬ならず!

思いどおりの犬群の獵芸が確認でき、安全で安心、そしてゆとりの獵ができた17年度の初獵であった。これからも、「獲れた」「獲れなかつた」を超えたところで、自分の理念に沿った狩獵を心がけ、素晴らしい猪犬の育成と獵技を極めたいと思っっている。